



島根県内で城の大部分が調査された大田市静間城跡と浜田市普源田砦跡の調査成果や出土品を展示するとともに、出雲を拠点に因幡、伯耆にも大きな影響を及ぼした尼子氏の本拠地である富田城跡についてもご紹介します。



静間城

島根県大田市にある戦国時代の山城で、標高約27mの小丘陵に造られています。城は丘陵頂部に造られた細長い主郭と、その北側に1段下がった小さな曲輪で構成されています。

主郭には倉庫や櫓と思われる建物のほかに、城主の居宅や会所として使われたと思われる規模の大きな建物が複数建てられていました。一方、北郭では作業小屋などに使われたと思われる小さな建物の他、鍛冶炉が見つかりました。

調査では中国や朝鮮で焼かれた磁器や備前焼の甕や摺鉢、素焼きの小皿などが見つかっていて、日常的に生活をしていた様子がうかがえます。

建物の構成や出土した遺物などから、この城が戦いのためだけに造られたのではなく、城主が暮らす居館を兼ねていたと考えられます。

静間城は15世紀後葉から16世紀前葉頃まで使われていたようで、建物が火災に遭った後に放棄されたようです。



静間城を北西上空からみた写真
(提供：島根県埋蔵文化財調査センター)



静間城の復元イラスト (16世紀初め頃)
(提供：島根県埋蔵文化財調査センター)

普源田砦

島根県浜田市にある16世紀前半頃の山城で、標高約63mの丘陵上に造られています。城には4つの郭があり、尾根筋を遮断する深い堀切と土塁、斜面に掘られた豎堀といった防御施設が確認されました。中心となる郭には複数の建物が向きを揃えて建てられていました。

出土品には中国製の磁器や硯、備前焼の摺鉢などがあり、当時の城内の様子が垣間見えます。

城がある辺りでは、浜田市の西側を治めた三隅氏と益田市に本拠を置く益田氏が争っていて、城が使われていた時期は両氏の争いの最後の時期に当たることから、その関連性が注目されます。



普源田砦を北西から見た写真
(提供：島根県埋蔵文化財調査センター)

富田城

鳥根県安来市広瀬町にある、戦国大名の尼子氏の本拠地となった山城です。城は標高191mの月山の頂上に本丸を置き、尾根上に多くの曲輪が造られています。城は尼子氏の滅亡後も毛利氏の家臣や吉川広家が入城しており、関ヶ原の戦い後には堀尾氏が松江城に移るまでの間この城を居城としていました。そのため、現在残されている城の遺構は尼子、毛利（吉川）、堀尾の各段階のものが存在します。

山麓を中心に積まれている石垣は吉川氏、堀尾氏の時代に改修されたもので、尼子氏の頃には石垣はありませんでした。尼子氏の頃の遺構が残っているところの中で、山頂に近い部分は丁寧な工事が行われた面積が大きい曲輪が多く見られますが、北側の丘陵にある尼子氏の遺構は曲輪が小さく工事が簡素であることから、毛利氏との戦いに際して急ごしらえしたものとする研究もあります。



富田城を北上空から見た写真
提供：安来市教育委員会



富田城の復元模型（吉川氏・堀尾氏の頃）
模型：安来市教育委員会 蔵



富田城の縄張り
(安来市教育委員会の縄張り図を使用して
高屋茂男氏作成、一部加筆)

新宮谷遺跡

新宮谷は富田城が築かれた丘陵の北側に位置します。ここには、尼子氏繁栄の礎を築いた尼子経久の次男である国久とその一族が住んでいて、住んだ場所の地名から「新宮党」と呼ばれていました。彼らが率いたのは尼子軍の精鋭部隊で、尼子氏の領土拡大に大きく関与しましたが、宗家の尼子晴久によって天文23年に粛清されました。

発掘調査で、廂付き建物などが確認されるとともに、粛清の際の火災の焼土などを廃棄したと思われる土坑からは屋敷で使われた中国製の陶磁器などが出土しました。



新宮谷遺跡で見つかった建物跡
提供：安来市教育委員会

